

武藏野幕屋創立38周年聖書講筵 祈祷会

私は火を地に投ぜんために来れり
——ルカ伝第12章49～50節——

1978年9月24日

小池辰雄

パリサイ根性 神的權威 靈火の人 靈火体 靈火を受ける大前提 不可離の十字架と聖靈

●パリサイ根性

ルカ伝第11章53節、

「⁵³此處より出で給えば、学者・パリサイ人ら烈しく詰め寄せて様々のことを詰りはじめ、⁵⁴その口より何事をか捉えんと待構えたり」（ルカ11・53～54）あしざまに考えて、何とかしてキリストを陥れようとしている。そのとき群衆がひしめき合っていたが、イエスはまず弟子たちに言い給うた。

「なんじら、パリサイ人のパンだねに心せよ。これ偽善なり」（ルカ12・1）

パリサイのパンだねは腐らせる酵母のようなもので、要するに、パリサイ根性というのは宗教界の一つの癌みたいなものです。

「パリサイ」というのは「分離者」の意味で、自分たちは他の者から「分かたれたる者」と自任し、モーセの五書に忠実な宗教的、道徳的、特権階級だと思つてゐる連中で、とかく他を審くわけです。宗派根性というのは大同小異で、大体このパリサイ根性に毒されているようなものです。自分の信仰箇条、礼拝様式、制度的な宗団のあり方等で他を批判して、おのれを義しとする根性です。

政治の世界でも、イデオロギーによつて、他のイデオロギーを悪し様に言つて、自分のイデオロギーの方に人を入れようとする。政治の世界でも、宗教の世界でも、その他諸々の文化現象において、共通に多かれ少なかれ、このパリサイ根性というはあるわけです。それからまた、人間が本来持つてゐる自己主張、自己弁護、これがみんなパリサイに通ずるわけです。自分を善しとして、他を悪しとする。ケチをつける。とにかく、人間のいるところには、パリサイ根性というのはつきもののようです。キリストが一番敵にしたのがこのパリサイなんです。

「取税人、遊女は天国に近い」

と。しかし己を義とするところの自己義認の、自己主張のパリサイは、実は天国に遠いんです。だから、キリストは自分を善しとなさらなかつた。



「神の外ほかに善きものなし」と。それでキリストを私は「無者」と申し上げざるを得ないわけなんです。キリストの言葉に、

「己おのを低おさうする」

という言葉がありますけれども、低さもどん底の低さなんです。またキリストは、「碎けの人」

であられました。「謙遜」という言がありますが、もう一つ奥の世界。神様を100%に立てる世界は、自分が碎けであり、ひれ伏しである。平伏し、碎けの魂は、詩篇51篇にある通り。自分をキリストの碎けの十字架の下に投げ入れる魂です。

キリストは手放しで「碎け」でありますけれども、我々は手放しで「碎け」になれない。だから、我々「罪びと」というのは、パリサイ根性がどつかにあるということです。我我が内にあるパリサイと、先ず戦わなければならぬわけです。

神様やキリストを相手としたら、自分の側には立場も、足場も何にもない。無立場です。自分を何ものかと思い、人を批判するパリサイ根性は人間の心の中の癌です。身体の癌に対する心の癌なのです。これが自己主張のパリサイ根性で、これが我執わたくしという罪の根です。「罪」とは神様を立てない、キリストを立てないで、自己を立てる事。どんなにそれが善きものであっても、自己おのを立てる限りはだめなんです。これは普通の道徳の世界ではわからない。道徳的に結構なことは、相対的現実では結構なことです。主義主張もそれだけなければならない。相対的な現実ではそういうことも言えます。

ところがそういう主義的判断からもう一つ上につき抜けないと、その主義も正しくは生きないので。それぞれのイデオロギーはそれぞれの良きを持つていて。良さを持つているけれども、これを限界を越えて主張したらパリサイになる。イデオロギーはある限界を持つたところのものですから。これを良く使うためには、もう一つ高い次元からこれを捉まえていなければダメで、その中に自分が居たらダメなんです。

突き抜けた高い処か、突き抜けたどん底か。一番高い処と、一番低い処はこれまた一つなんです。

「至高いとき者ものは心の碎けたる者ものの中に住む」

とイザヤ書57章15節にある通りです。天の星は深淵に影を宿すのです。相対的判断を絶したところから見ていくと、今度は相対的判断のいろいろなことをオリエティーレンする。即ち位置付けをすることができる。その限界をちゃんと究めていくことができる。要するに色眼鏡めがねでなく、天然自然の眼で見るわけです。太陽の白光だから見えるんです、良さも限界も。そういうことになつたら、もうパリサイ根性から抜けている。パリサイ根性から抜けるためには、絶対的なものの中へ入らなければダメ。要するに、相対的現実にありながら、絶対境うちを裏もに有つということです。



「キリストの中に」「エン・クリストー」の現実が信仰の奥義です！そしてキリストの光を浴びる。烈々たる太陽の如きキリストの中に入ると、聖靈という火の如き靈に触れる。聖靈のバプテスマにあずかる。そして、自分自身が靈火的な体になつてしまふ。

だから、

「パリサイ人のパンだねに心せよ」

とキリストは言われるけれども、同じ次元で心したつてダメですよ。それはもうひとつ大きな、高處から見れば、キリストが言われる「心せよ」が楽に受けとることになるのです。自己義認がパリサイ的偽善の源なんです。何か偽りの悪い事をしているということではない。パウロが、

「律法の義につきては責むべきところなし」

と言つてはいる。その立派さが偽善なんです。パウロはキリストにぶつかつてそれがわかつたのでこれを塵芥ちりあくたの如く棄てました。

●神的權威

第12章の5節に、

「⁵懼るべきものを汝らに示さん、殺したる後^{おぞ}ゲヘナ永遠の罰を与えるところの地獄のことです。

に投げ入るる權威ある者（即ち神様）を畏れよ。

と。神様の權威、神威、神權。キリストは自分を無者にしたらば、本当の神權者になつた。神の權威を持つ人になつた。だから、人々は、学者の如くならず權威ある者らしく語るキリストにびっくりした。ほじくりまわしてはいるようないわゆる学者なんていうものは大したことではない。學問の權威というものをここにけなしてはいるではありませんが、いわゆる分別の世界を超えた世界に入らなければ、たましいの本当の世界はわかりません。

われ汝らに告ぐ。げに之を畏れよ」（使徒行伝12・5）

神様を畏れよ。キリストは本当に神を畏れた。畏神とは神様を恐がることじやないです。神の前に本当に平伏して自分を何者ともしないということが畏神ということ。そうすると神嚴なるものがこちらに入つて来る。

●靈火の人

死んでも死なない、肉体は焼かれても焼かれないもの、これが今日私たちが祈祷会で言うところの火〔靈〕なんです。

「心頭ひを滅却すれば火もまた涼し」

と言うが、

「心中に靈火あれば火も尚涼し」



でありましょう。靈火は赤い火より凄い火です。靈火はまぶしくて目がくらんでしまう。赤い火ではなくて黄金色に輝く火。

そこでパリサイ根性から抜けるためには、キリストの十字架で魂が碎かれることが先決です。そしてみ靈による黄金の火を受けとることです。

「我は火を地に投ぜんために來れり」（ルカ12・49）

この靈火を受けとる人々は、

「ああ、われ悩める者なるかな」

と言つてキリストに依りすがる者、悲しむ者、泣く者、求める者、みんなこの火を受けることのできるたましいです。

「幸なる哉、キリストの靈火を受ける者」と申したい。キリストは、

「わたしは神様から火をもらつてているのだ、これを受けよ」と言つておられる。そういう靈火の人です。

「私はこの火を投じようとやつて來た」

大切なのは正にこの一句なんです。

●靈火体

「火を投ぜんために」

と、靈火を投じようと思つて来られた。いや、実にキリストの在るところに靈火が燃えていた。現在でも本当にそうです。だから、この靈火の中に投身、靈火の中に自分を投身させて、私たち自身が靈火現象を起こさなければダメです。私たち自身が靈火体にならなければ。

「我は火を地に投ぜんとてきた来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん」（ルカ12・49）

「おまえたちの中にこの靈火が燃えたら、もう私はいいんだよ」と。そうなつたら我らはもう運命、環境がどうなろうと、必ずこの靈火で勝つていける。

「環境をどうする、運命をどうする」とか、そういうことは第二義的なことで、第一義的なことは自分自身が靈火体となることです。問題はただ一つ。そうしたら周りが、

「何だか知らんけど、こりや大変な奴だな。もう相手ではない。参りました！」とか、そなつたら我らはもう運命、環境がどうなろうと、必ずこの靈火で勝つていける。問題はただ一つ。そうしたら周りが、

「こちらは無手勝流、無刃流です。まあひとつ、真剣に祈りの人になつて下さいよ。祈らなければ絶対にダメ。パウロも、

「つねに祈れ！」

とローマ書第12章で言つています。マルティン・ルターはコーブルクの城で毎日3時間祈



つていたという。

キリストは聖靈のことを「火」ここでは言つてゐる。

「私が与える靈火が燃えたら、万事善し」

というのがこここの気合。ある時は、

「私の与える水を飲んだら永遠に渴かないぞ」

とヨハネ4・14でイエスは言いました。不尽の泉が涌き出でる。活泉である。こちらはまた、炎々として燃えて尽きない太陽に聖靈を譬えておられる。太陽を冥想するだけで凄い事になる。キリストを冥想しながら、キリストの靈火漬けになつてごらんなさい。そうしたらえらいことになります。キリストと偕に海の上をも涉つてしまふかも知れないぞ。

●靈火を受ける大前提

「されど我には受くべきバプテスマ（十字架）あり。その（十字架の贖罪死の）成し遂げらるるまでは思い_{せま}遁_{いかばかり}ること如何許ぞや」（ルカ12・50）

「靈火を投じようと思うが、今は投じられない。私は断腸の想いである。この火が燃えるためには、わたしは十字架というバプテスマを受けなければならない。お前たちのその自我、我執、パリサイ根性を根こそぎにしてやらねばならない。全部わたしが引き受けた！」

こんなお氣持がキリストの腹の中におありだつたのでしよう。贖罪の十字架こそ靈火を投げる大前提であつたことを夢忘れてはなりません。

我々は何時まで経つても同じようなもんだ。人間という奴はいわゆる信仰を持つたつて、それでどうかなるような簡単なものではない。パウロですら、

「_{ああ}噫、われ悩める人々の_{からだ}かな、この死の_{からだ}体」

と言つたでしょ。救を要しない人は一人もありません。立派もへつたくれもないんですよ、本当は。それを相対的に、

「あのは立派だ。この人は潔い_{きよ}」

なんて、品きだめのようなことを言う。まだそういう相対的な評価などしているのはおめでたいはなしです。偉大なる宗教家たちの苦惱は、そんな判断の奥の世界での苦惱でした。そこでたましいの苦闘をした。相対的評価を絶したところに往くと、第一流の宗教家たちの心境がわかる。アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、等々の預言者やペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロ等の使徒たちはそういうたましいの戦をやつたのです。

●不可離の十字架と聖靈

キリストが火を投じようとして、まず受くべきバプテスマ、十字架を思われたこと。その49節と50節。これは忘れる事のできない2節です。この二つにおいて本当にキリスト



の本願の呻きと叫びを受けとればえらいことになる。ルカ福音書12章49節、50節！ この50節が十字架の贖いであり、この49節は聖靈のバプテスマです。

「この十字架の贖罪死を遂げたら、お前たちに靈火を投げる」と。これがペントコステの聖靈なんです。

「今、私は十字架の贖罪死を遂げたら、復活、昇天して、聖靈をくだすことができる」と。これが救の確かに二焦点です。即ち十字架と聖靈。イエスがここで呼ばれた十字架のバプテスマと聖靈の火です。

我々はキリストの十字架で贖われました。何ももう問題はありません。ですから、靈界から投ぜられるキリストの靈火、聖靈を、祈りを以て無条件に接受します。この十字架と聖靈に我らの救いの確かに根拠があります。キリストの榮光と永遠の生命、キリストの義と愛が我々を圧倒するように臨んで来ました。アーメン、ハレルヤです。新春を迎えて、この靈火、靈光を新たに賜り、聖靈の靈火体とされて邁進まいしんします。

「されど我には受くべきバプテスマあり」

はこの私たち、どうにもならない者のために、十字架で全部贖罪して下さった。もうたまらんです、キリストの十字架は。だからもう無条件に、有るがまま、このままキリストの中に自分を投げ入れます。自熱的祈入、電光石火、靈火体とされる。絶対次元、身辺にあります。キリストの靈光靈火を浴びて、

「狂えるならば神のためなり」とパウロと共に叫ぼう。

この2節に圧倒され、

「キリストわがうちに、われキリストの中に」

「エン・クリストー」

の現実を日一日と進み往かん！ もう何が起きても本当の勝利で相手を担い、相手を包んでしまって、本当の歓喜の世界を展開しつつ進みます。ハレルヤ。

〔附記〕本稿は1978年9月24日、武藏野幕屋38周年記念祭の夜の祈祷会で語つたものに基づく。

(「活かすキリスト」155号 1979年1月号より転載)

